

# なぜ？テンカラ——語源へのアプローチ

山がたり\*  
溪がたり\*

擬似バリの歴史は案外古い。江戸初期の京では毛バリが売買されたという。加賀では鮎釣りをテンカラと呼んだ。その糸をたぐっていくと…。

石垣 尚男

溪流のアマゴ、ヤマメ、イワナを釣るとき、毛バリを使う釣り方は、テンカラ、毛バリ、毛釣り、トバシ、タタキ、ハシラカシなどと呼ばれ、地方によつて呼び方は様々であった。溪流の毛バリ釣りが、今のように一般にテンカラと呼ばれるようになったのは、ここ20年来のことである。信州の木曾では溪流の毛バリ釣りを以前からテンカラと呼んでいた。元来は中部山岳地方の一地方名にすぎなかったテンカラが折からの釣りブームに乗って、加速度的に波及していったようであるが、さて、そのルーツは？

## 擬餌バリはいつ頃できたか？

日本では縄文後期：毛バリも江戸初期には普及：と文献にある

釣りバリが考案されたのは、今から約一万年前であるといわれる。釣りバリが考案されるまでは銛で突くとか、棒で叩く、石を投げるなどして、いわば飛び道具で一方的に攻撃、襲撃して魚を獲っていた人間が、魚の口の中にハリを含ませて釣るという方法を考案したとき、まさに釣り文化が誕生したともいえる。

石の刃物で骨や角を削っていたらしい。石器で果して角が削れるかと思うが、偶然の機会があるいは考案したかはわからないが、角も水に漬けておくと、石器でも簡単に削れるほど軟くなるそうである。

ヨーロッパや北欧ではすでに新石器時代の中頃にかけて擬餌バリに似たものが使われていたという。日本でも後期縄文文化期には擬餌バリと思われるものがみられるという（釣針・ものと人間の文化史 直良信夫）から、餌で魚を釣り始めてそう時を経ずして（といっても数千年の経過があるが）餌を用いないで魚を釣る方法を考案したようである。今日では擬餌バリは釣漁界の龍児であるようて生産される釣りバリの3分の2は擬餌バリであると聞いている。

擬餌バリが考案される動機について、渋沢敬三氏（日本釣魚技術史小考）は次の三点を挙げている。要約すると、

- 一、餌が手に入らないときや、餌を食わないときの積極的な対策。
- 二、偶然の機会に、日頃餌として効力がないと思われるものに魚が集まったり、餌のように扱っているのを見つけ、この観察にもとづくもの。
- 三、すでに擬餌の効果を知っていた場合、餌の節約、餌のつけ替えの労力や時間を節約して漁獲を上げるため。

このうち溪流の毛バリ考案の直接のきっかけになるのは、餌でもないものに餌集したり、餌のように扱うのを見たときであろう。我々として餌には見向きもせず、目印に盛んに飛びつくようであれば、目印にハリをつけたら釣れるのではないかと誰れでも思いつくであろう。恐らく毛バリ考案のヒントは昔の人も同じところにあつたであろう。水鳥の中には、自らの羽根を水面に落として寄ってくる魚を獲る習性をもったものもあるから、ハリに鳥の毛を巻くというのも案外、こんな瞬間を目撃して思いついたのかもしれない。

さて川釣りにおいて毛バリが用いられていたことを示唆する最も古い記録は延宝六年（一六七八年）の「京雀跡追」にある。

地之巻

大もんし町 此町

魚釣針屋有 伊右衛門と云

はへ頭其外色々しこみのつきさは品々有

であるといわれる（勝部直達 釣針史料集成）。

はへ頭は蠅頭のことと鮎を釣るための毛バリであつたらうといわれる。蠅頭とは馬の尾、またはクジラのヒゲで蠅の頭に似せて作つた毛バリのことで、後に蚊頭と呼ばれ、その後、蚊鉤と呼ばれる一



層精巧に作られた毛バリの原型をなすものである。すでに京では江戸時代の初期において毛バリが商いされるほど鮎の毛バリ釣りが一般化していたことが伺われる。

また当時すでに、しこみのつぎさほ(仕込みの継ぎ竿)、これは刀剣の鞘や袋、あるいは杖の中などに仕込み仕立てで作られた継ぎ竿のことで、江戸初期、京ではこのような高度の製竿技術がすでに発達していたことがわかる。

アマゴ・イワナ釣りに毛バリを用いていたことを示す記録は全くないようである。釣り場が京や江戸を遠く離れた僻地であるし、アマゴ・イワナ釣りは遊漁の対象ではなかったから、毛バリは職漁師の領域を出ることはなかったであろう。仮に行なわれていたとしても文字を知らず、伝えるすべのなかった職漁師の釣りは後世には残し得なかった。

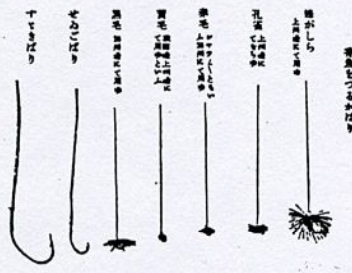
一八三四年(天保五年)城東漁父によって書かれた「魚獵手引」には「香魚を釣る蚊鉤」として五種類の毛バリが描かれている(永田一脩「江戸時代の釣り」)。

永田氏はこの中でひととき大きい蜂がしら―上州辺にて用ゆ―とある毛バリはヤマメ・イワナ用の毛バリではないかと想像されている。

少し話が横道にそれるが、愛知県奥三川の足助町の元職漁師に昔の毛バリ釣りの話を聞いた折、蜂がしらの話が出てきたことがある。その元職漁師は明治三二年生れ、今から約七十年前にボンツク(職漁師)稼業の仲間入りをしたが、その頃、代々職漁師であったボンたちは「毛バリの頭に玉をつける」といって、何で作っていたかは知らないが蜂の頭(蜂がしら)というものを作っていた」というのである。

「魚獵手引」の蜂がしらが溪流用の毛バリであるとすれば、江戸時代末から明治にかけて溪流用の毛バリとして「蜂がしら自信バリ」のようなものがあつたのではと思われるのである。上州と三河では地理的に離れているが、上州辺りでは用ゆ―といつても果して上州で作られたものか。あるいは京で作られ各地に流布していたものかもしれない。「魚獵手引」の蜂がしらは職漁師のアイデアをもとに作られた?とすれば、あながち関係なしとはいきれない。

アマゴ・イワナ釣りが記録に残されているものとしては元禄七年(一六九四年)に書かれた加賀藩奥山廻役・宗兵衛記録が最も古いようである(甲山五一「釣り文化五号」)。これはイワナ釣りの記録であるが、加賀藩の支配下にあつた黒部川でイワナ釣りをしていた五人組をみつけ、小屋を壊した上で釈放したというものである。なぜ、イワナを獲ると罰せられたかという点、当時は殿様の力が藩内のす



「魚獵手引」中の「香魚を釣る蚊鉤」

みずみにまで及んでいたもので、イワナを獲ることはすなわち殿様のイワナを盗ることであると甲山氏は述べている。この五人組が餌釣りであったか毛バリ釣りであったかは明らかではない。

更に甲山氏は毛バリ釣りが記録に残されたものとしては、英国公使館書記アーネスト・M・サトウが、ときの英国公使ハリー・スミス・パークスとともに明治十一年、立山登山をした時の記録「立山登山日記」に黒部川のイワナが毛バリで釣り上げられていたという記述が最初であるという(釣り文化五号)。

この日記には、夕食に岩魚といううまい魚を食べたこと、それは鶏の羽根で作った毛針で釣ったもので四分の三ポンドあつたことが記されている。甲山氏はこの時イワナを釣ったのは「釣り師遠山品右衛門 アテネ書房」の主人公、品右衛門ではなかったかと推理している。遠山品右衛門の使った釣り具は今も長野県大町市の山岳博物館に展示されているそうである。

## テンカラの語源はどこから?

加賀では鮎の掛け釣りをテンカラと呼んだ。では、なぜ毛バリ釣りが…?

溪流の毛バリ釣りの起源を遡っても記録の上では明治以前までは遡れないようである。では、もう一つの疑問、いつ頃から毛バリ釣りをテンカラと呼ぶようになったのであろうか。いつ、どこで、どのような経過かはわからないが「テンカラ」と呼ばれる鮎の掛け釣りが、毛バリ釣りに転化していったとみるのが一番妥当なようである。

江戸時代、主として加賀藩で行なわれていた「テンカラ」と呼ばれる鮎の掛け釣りは、鉛製の円錐型の底部から三―四本のハリを出し、テンカラポーンと呼ばれる糸の先に結んで、これを鮎のいるところに投げ、一m余りのテンカラ竿で川の中を引いて鮎を掛けた掛け釣りの一種であつたらしい(小口修平「釣りの歳時記」テンカラ談義)。大正から昭和にかけても金沢では盛んに行なわれていた釣りで、昭和三十年頃までは行なわれていたという。

標準の長さが三尺三寸の竿で馬の毛や人造テグスの糸を投げ、鮎がハリに近づくのを見てシャクッと掛ける素掛けの一種であつたようである。ハリの形状こそ、ギャング釣りのハリに以ているが、ギャング釣りのように根こそぎというのではなく、鮎だけをねらった難しく、また、楽しい釣りであつたようである。

江戸時代、加賀藩の武士たちには身心練磨のため釣りが大いに奨励され、盛んにテンカラで鮎を釣つたようである。武士たちは仕掛



けを頭上から振り込んでいたので町人や百姓は、あれは釣りではない、鎖鎌の稽古のようだと行ってたという。

水田氏(江戸時代からの釣り)は加賀地方のテンカラは他に京都、紀州、周防、秋田、宮城でも行なわれており、テンカラは元来、テングラといい、天唐と書くという。天唐の天は唐天竺の中国を指し、ガラはガラ引きのガラ、掛けるの意味であって起源は中国から伝来した掛け釣りにあるのではないかと推測されている。

テンカラが引つ掛け釣りであって、これが溪流の毛バリ釣りに変わったとするならば、どこかで誤用があったことも考えられる。加賀藩の武士の間ではテンカラとともに毛バリで鮎を釣っていたらしい。つまり、同時並行的に毛バリ釣りとテンカラの引つ掛けが行なわれていた訳で、これは昭和になってからも続いていたと思われる。この間、いつの間にか毛バリテンカラとなって、テンカラとは毛バリ釣りを表わす呼称に変わっていったという想定である。

誤用のキッカケとなるには勘ちがいということもままあることである。毛バリ釣りを指して何という釣りかと聞いたときに、聞かれた方はテンカラ釣りを聞かれたと思って、「テンカラ」と答えた……などということもあったかもしれない。亜鉛板が明治の頃、輸入されたとき、フリキの束を指してアロックというのを聞いて亜鉛板をアロック→フリッキというのだと勘ちがいしてフリキとなったというから、世の中誤用がそのまま使われる例はめずらしいことではない。

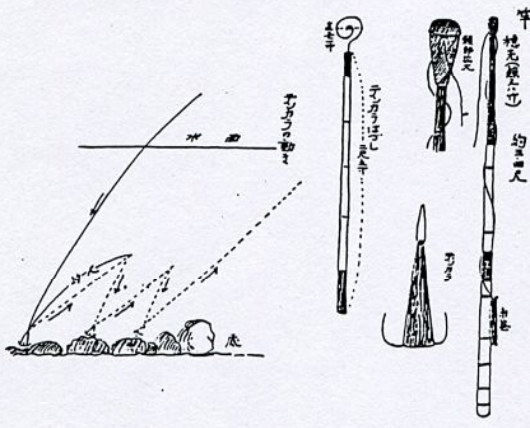
誤用がキッカケかはわからないが、昭和九年の「水の趣味」には山崎竹翁氏が鮎の引つ掛け釣りをテンカラとし、現在、金沢では盛んに試みられている釣技である……と紹介している。同じく、昭和七年刊の(鮎を釣るまで 藤田栄吉)には蚊鉤釣りの名称について「金沢では沈み釣り……福島地方ではテンカラ」とある(ともに「江戸時代からの釣り」より引用)。

つまり、二つの記述を照らし合わせると昭和初期には金沢では毛バリ釣りは沈み釣り、引つ掛けはテンカラと区別していたがすでに福島地方では毛バリ釣りをテンカラと呼んでいたことがわかる。従って、もしかすると最初に毛バリ釣りをテンカラと呼ぶようになったのは本家である金沢以外のことだったかもしれないし、木曾地方で毛バリ釣りをテンカラと呼ぶようになったのは、大正に遡るほど古いものではない(釣りの歳時記)とすると、昭和の初期の頃に、次第に毛バリ釣りをテンカラと呼ぶようになっていったのではと推測される。

ただ最初からテンカラは溪流の毛バリ釣りを指したのではなく、毛バリ釣り全般を呼んでいたが、次第に溪流の毛バリ釣りを指す呼称に変わっていったのではないかと思われる。

前出の足助の職漁師の話では、七十年前、すでに奥三河一帯では毛バリ釣りのことをテンカラと呼んでいた(記憶に間違いがなければ)というから、昭和初期よりも少し早い頃かとも思うが、職漁としてやっていた白ハエ(ハエ)の毛バリ釣りもテンカラと呼んでいたそう、テンカラというのは毛バリ釣りを指す言葉であったことが伺われる。

テンカラ釣りの仕体と運動



テンカラ釣りの仕体と運動(「水の趣味」2/8号より)

一 地方名であった毛バリ釣りの呼び名を日本の伝承釣り「テンカラ」とすることは異議ありというむきもある。トバシ、タタキ、ハシラカシという呼び名は次第に消えてゆくのであろうが、残念な気もするがこれも時代の流れなのかと思ってしまう。アマゴという呼び方にしても、今でこそ全国どこでもアマゴで通るが、当地方ではつい二十年ほど前までは土地の仁にアマゴといってもほとんど通じなかった。赤い斑点のある……という、あーアメのことかとやっとわかってもらえたほどであったが、今ではアマゴをアメと呼ぶ人がほとんどいなくなってしまう。時の流れの早さである。

テンカラが木曾の一地方名から日本の毛バリ釣りを代表する名称にまで昇格したのは単なる偶然ではないように思える。引つ掛けのテンカラ(テングラ)が記録に残されてすでに百五十年余が経過している。この間、毛バリ釣りへの転化があったとしても江戸時代の呼称が今に受け継がれ、しかも日本を席巻する勢いで広播したのは、テンカラという言葉そのものに秘密があるように思えるのである。テンカラと次第に語尾の上がる、カラツとした明るい響きが軽快な毛バリ釣りのイメージとびつたり合うことと相俟って、話す方も聞く方も、実に耳ざわりの良い言葉となっているのである。テンカラがテンカラに変わっていったのも、こんなところにあるのかもしれない。

百五十年以上も命脈を保つ言葉には言葉の意味を越えた響きの好き嫌いがあるように思える。毛バリ釣りがある限り使われる言葉ではなからうか。

図は水田一脩氏著「江戸時代からの釣り」新日本出版社(1986年)より転載させていただいた。